

福島県国見町の史跡「阿津賀志山防塁」について

—文治5年奥州合戦の実証遺跡—

安田 稔（国見町企画調整課地域振興係）

1. 史跡の概要

阿津賀志山防塁は、文治5年(1189)に源頼朝が率いる鎌倉方と奥州藤原氏の軍勢が戦いを繰り広げた「奥州合戦」にともなう史跡である。堀と土塁から構成される防塁は、福島盆地（信達盆地）の平野部から宮城県境の峠に向かって平野が狭まっていく場所を遮断するように、また平泉方への入り口を塞ぐように築かれている。その総延長は阿津賀志山（標高 289.4 m）中腹から阿武隈川の旧氾濫原に至るまでの約 3.2 kmを測る。当時の基幹交通路である東山道の陸上交通と阿武隈川に伴う河川交通双方を強く意識して設置され、二重の堀と三重の土塁からなる構造（二重堀構造^{ふたえぼり}）を基本とする。源平争乱から奥州合戦までの内乱期にとられた、交通路を遮断し要塞を構える戦術を現在に伝える、唯一最大の遺跡である。

2. 阿津賀志山防塁の現況

阿津賀志山中腹から始まる防塁は、現在の国道4号付近までの約 500 mの範囲が直線的に構築されている。国道4号北側地区では、外土塁上半が削られ外堀が埋まっているものの、幅 24 ～ 25 mで防塁の遺構が良好に確認できる。

平野部にはいると防塁は、おおむね滑川（阿武隈川水系）の河岸段丘を利用して、蛇行するように築かれている。前面の滑川とそれに伴う湿地帯（泥田）を堀とし、段丘の高低差を土塁に活かした造りとなっている。堀が1本となる範囲も一部存在するが、南端に近い下二重堀地区付近でふたたび二重堀構造となり、阿武隈川の旧氾濫原に至る。下二重堀地区は、長さ 200 mの範囲で堀と土塁が良好な状態で遺存し、その様子から地名としても残っている。

3. 阿津賀志山の合戦

阿津賀志山防塁を中心に展開した阿津賀志山の合戦は、源頼朝が率いる鎌倉方と大將軍藤原国衡が指揮する平泉方の双方数万の軍勢が対峙し、奥州合戦最大の激戦地となった。本町を主戦場とする戦闘が3日間にわたり続き、その合戦の状況は『吾妻鏡』の記述により知ることができる。

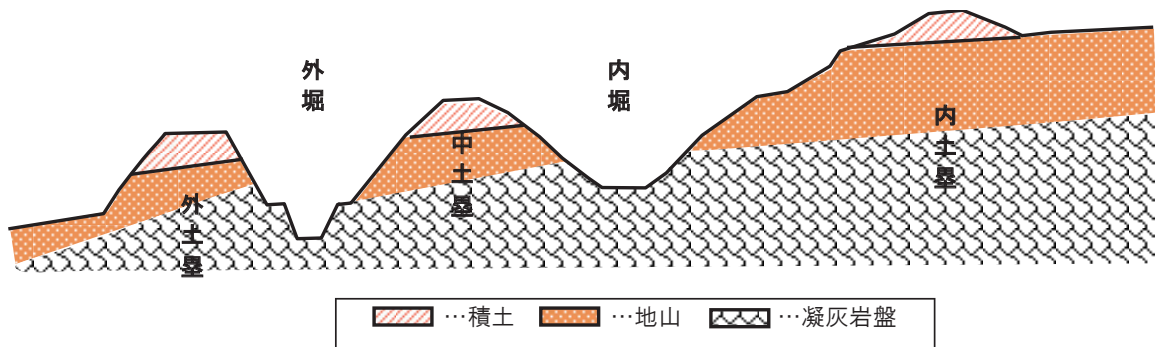
阿津賀志山の合戦での敗退以降、敗走を続けた奥州藤原氏の第4代当主藤原泰衡は、多賀城・平泉を放棄し北海道に逃れる途中、秋田県北東部（比内郡）の地にて家臣に殺害される。奥州藤原氏の滅亡は、阿津賀志山の合戦での勝敗で決したといっても過言ではなく、源平合戦から続く全国規模の内乱を終息へと向かわせる契機となった。

阿津賀志山の合戦のながれ 斜文字…『吾妻鏡』文治5年(1189)の記述より

2月 9日	源頼朝 南九州島津にいたるまで動員令を発する(日本六十四ヵ国総動員令)
閏4月30日	源義経、衣川館にて藤原泰衡の軍勢に攻められ殺害。
7月19日	源頼朝が鎌倉を出陣。奥州藤原氏は、阿津賀志山に防塁を築いて待ち構える。 「二品(源頼朝)の発向(出陣)のことを聞き、……阿津賀志山に城壁を築き要害を固め、国見宿と彼の山との間に、俄かに口五丈の堀を構えて、逢隈河 あぶくまかわ の流れを堰入れて柵とした」
7月29日	源頼朝が白河関を越える。(大きな戦闘はなかった) 「秋風に草木の露を払 はら せて 君が越 こ れば関守も無し」(梶原景季)
8月 7日	源頼朝率いる鎌倉方の軍勢、国見駅(現在の国見町藤田と推定)に到着。 奥州藤原氏は、藤原国衡を大将とする、二万余騎の軍勢で待ち構える。 「おおよそ山中三十里の間、健士充満す」 深夜に鎌倉方畠山重忠の部隊が、防塁突破に備え橋頭堡(進撃路)を築く。 「(畠山)重忠は率いてきた人夫八十人を召し、用意していた鋤・鍬で土砂を運ばせ、かの堀を塞いだので、まったく人馬の障害がなかった。(重忠)の思慮はまったく神に通ずるものである。」
8月 8日	阿津賀志山防塁を守る平泉方の金剛別当秀綱と鎌倉方の畠山重忠・小山朝光・加藤景廉・工藤行光・工藤祐光らにより戦闘が開始。攻防の末、秀綱の陣地が攻め落とされ、阿津賀志山防塁は破られる。 同日には南に25kmの石那坂でも合戦が行われ、平泉方の信夫庄司佐藤基治らが、鎌倉方の中村入道念西(伊達朝宗)らに敗れる。
8月 9日	藤原国衡の本陣(大木戸)にて戦闘(こう着状態)。 中村入道念西ら石那坂の合戦にて打ち取った信夫庄司佐藤一族の首を、経ヶ岡にてさらす。
8月10日	藤原国衡の本陣での激戦。鎌倉方の奇襲により国衡は敗走。 「(鎌倉方7人の武将が)伊達郡藤田宿より会津の方に向かって土湯の嵩、鳥取越などを越え、大木戸の上にある国衡の後陣の山によじ登ると、時の声をあげて矢を放った」 敗退を知った藤原泰衡は、総本陣としていた国分原鞭楯 こくぶんはらむちだて (仙台市宮城野区榴ヶ岡付近)を放棄し、平泉へ向け敗走。藤原国衡は、宮城県大河原町付近で追撃を受け討ち死に。
8月12日	源頼朝、多賀国府に到着。
8月22日	源頼朝、平泉に到着。藤原泰衡は自らの館を燃やし北逃。
9月 3日	藤原泰衡、贅 にえのさく 柵(秋田県大館市)にて家臣の河田次郎に殺害。
9月 4日	源頼朝、陣ヶ岡に着陣。北陸道(出羽国)を進んだ軍勢も加わり28万4千騎となった。

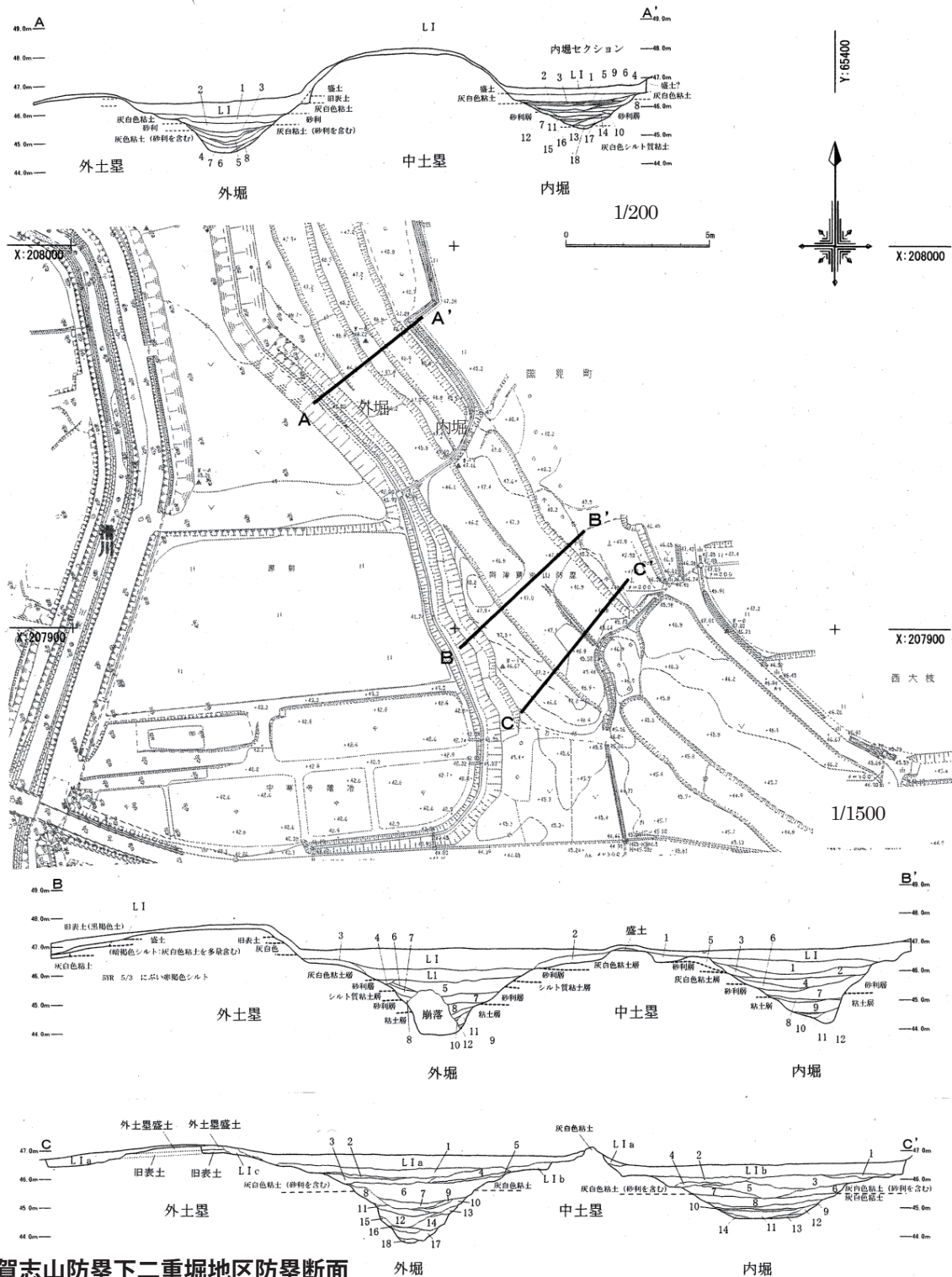


阿津賀志山防塁位置図



阿津賀志山防塁断面模式図(国道4号地区)

奥州藤原氏により築かれた 3.2 km の阿津賀志山防塁は、のべ 25 万人の労働力が動員され、藤原国衡の本陣である「大木戸」などを合わせると総計 40 万人が動員されたとみても大過はないとの推定がなされている（小林 1979：発掘調査による作業員労働時間を基礎に算出）。当時の奥州藤原氏が、源頼朝を迎え撃つために総力をあげ、広域的な動員（動員範囲は宮城県域の刈田郡、福島県域の伊達郡・信夫郡に及ぶと考えられる）により構築した遺構である。



阿津賀志山防塁下二重堀地区防塁断面

文治5年奥州合戦の実証遺跡としての阿津賀志山防塁

阿津賀志山防塁は福島県と宮城県の県境に位置するが、この境界ラインは6世紀における大和政権の地方統治システムである国造制が敷かれた最北ラインと重なるラインである。このことからすれば福島県域は東北地方においても早くから機内を中心とする中央集権国家圏内に含まれていたことが知られ、7世紀後葉段階でいち早く県内の郡衙機構が整備されたことでもそのことを知ることができる。

また12世紀には在地豪族による中央の権門勢家を持んだ荘園化が進む地域であり、宮城県以北とは異なる地域的特色を有していたといえることができる。このような背景を持つ県境ラインに築かれた防塁は、藤原氏が南に勢力を伸ばすために超えていかなければならない衣川ライン・多賀城ライン等に次ぐ最南部ラインとすることができ、さらにその南部に重臣である佐藤氏一族が勢力を張ることで睨みを利かせていたと考えることができる。

阿津賀志山防塁は合戦に備えるために急遽築かれた前線防御施設であるが、古代以降の歴史的観点からしても実に意味深い場所に築かれた施設であり、その構築のための動員体制を考えれば、東北部における藤原氏の実質支配を実証できる貴重な遺構とすることができる。

文治五年奥州合戦は、1180年（治承4年）の以仁王の挙兵にあわせた平家追討の令旨に端を発する10年間にわたって繰り広げられた古代最後の内乱（治承・文治の内乱）の最終合戦である。初めての武家政権樹立者である平清盛に連なる平家一門を壇ノ浦に滅ぼし、関東以西を手中に収めた源頼朝は、その矛先を義経追討を口実として奥州藤原氏へと向け、文治五年奥州合戦へと突入する。

動員された軍勢は、奥州藤原氏が陸奥・出羽の2ヶ国を合わせ17万騎（『吾妻鏡』文治五年九月七日条）と記され、源頼朝率いる鎌倉方の軍勢が「軍士二十八万四千騎、ただし諸人の郎従等を加う」（『吾妻鏡』文治五年九月四日条）との記述がある。また、鎌倉方は、出羽・陸奥を除く六十四か国の武士が動員されたことも明らかになっており（入間田1983）、全国的な規模での合戦であった。このことは、鎌倉幕府の成立を目指す源頼朝による時代の転換となる合戦であったことを物語っている。全国的な規模での時代の転換もさることながら、東北地方においては奥州合戦の功績により奥州藤原氏に代わる新たな領主として、中世から近世の東北史において中心的役割を果たす伊達氏・相馬氏・葛西氏などが入部することとなり、大きな分岐点となった。

以上の要素を持つ奥州合戦において、最大の合戦が繰り広げられ、同合戦によって構築された唯一の国史跡であるのが阿津賀志山防塁である。阿津賀志山防塁は、奥州合戦最大の激戦地となり、奥州藤原氏の敗北が決定的となっただけでなく、その後の東北史に影響を及ぼすほどの大きな出来事を現在に伝える歴史遺産である。

引用・参考文献

小林 清治 1979「奥州合戦と二重堀」『郷土の研究』第10号 国見町郷土史研究会

入間田 宣夫 1983「文治5年奥州合戦と阿津賀志山二重堀」『郷土の研究』第13号 国見町郷土史研究会

平泉町 2012『平泉一光と水の浄土』